The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

六朝門閥陳郡陽夏謝氏の系譜とその周辺

小松英生

はしがき

陳郡陽夏の謝氏は、太原、琅邪の王氏と並ぶ東晋貴族の一流であり、その門からは、政治家としては謝安、謝玄、謝晦を、文人としては謝霊運、謝惠連、謝荘、謝朓を輩出している。従来この謝氏に関する研究は、多く宋の謝霊運、南斉の謝朓の伝と文学に関するものであって、六朝門閥としての謝氏の研究は寡聞にしてまだ聞かない。王氏に関しては、守屋美都雄氏に「六朝門閥の研究」という名著があるが、謝氏に関してもその等の研究があっておかしくない。そう思って、以前に作っておいた謝氏の家系図をとり出してみると疎略の部分もあり、今一度整理してみようという気持ちになった。

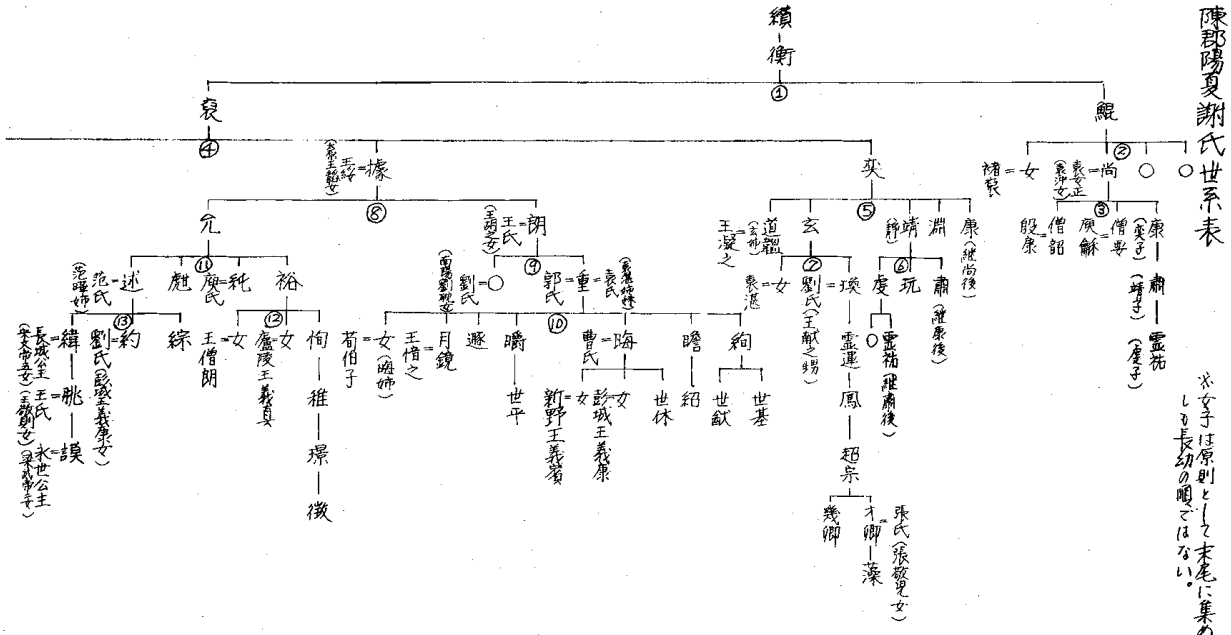
謝氏の家系については、古くは南宋の汪藻の「陳国陽夏謝氏譜」（前田家尊経閣蔵宋本世説新語所収）があり、近くはこれに手を加えた楊勇氏の「陳郡陽夏謝氏世系図」があって参考になる。しかし楊勇氏のそれは直接にみることができず、小尾郊一著「謝霊運伝論」（小尾郊一博士退官記念事業会）に引用されたものに依ったが、これは世系図のみであって、その拠りどころとなる資料は提示されていない。私としては、世系図と、その拠りどころとなる資料を提示し、加えてできるだけ他家との相関を、婚姻関係を通してみてみたいと考えた。従って本稿は、世系図と、その余はすべて「注」というかたちになっているが、この「注」が主体であって、その中に他家との婚姻関係が図示してある。拠りどころを明らかにしていない部分もあるが、それは該当の人物の伝を見れば明らかだからである。

この調査のために用いた資料は、晋書、宋書、南斉書、梁書、陳書、南史などの正史のほかは、世説新語及びその劉注である。もう少し広範に、個人の集なども含めて資料を求むべきであった。その点がいささか心残りであるが、今後の調査をまって、加うべきを拾いたいと思う。

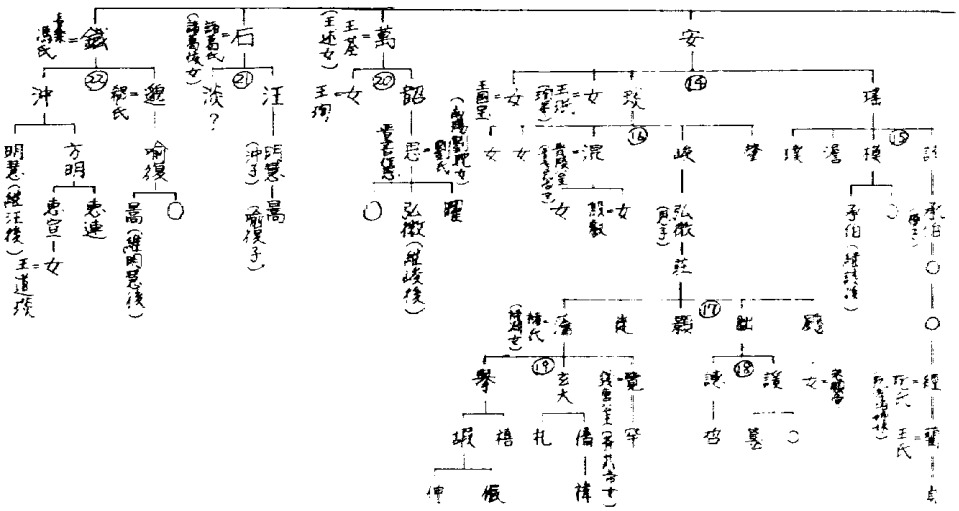
NII-Electronic Library Service

陳郡陽夏謝氏世系表

※女子は原則として末尾に集めたが、記載の順は必ずしも長幼の順ではない。



NII-Electronic Library Service



NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

注

①

○晋書巻四十九謝鯤伝、謝鯤字幼輿、陳郡陽夏人也。祖纘、典農中郎将。父衡、以儒素顕、仕至国子祭酒。

○世説新語（以下世説）方正篇25劉注引永嘉流人名、袁字幼儒、陳郡人。父衡、博士。袁歴侍中、吏部尚書、吳国内史。

○世説任誕篇33劉注、尚書、謝袁。（謝）尚叔也。

②

○晋書巻七十九謝尚伝、謝尚字仁祖、豫章太守鯤之子也。幼有至性。七歳喪兄、哀慟過礼、親戚異之。

○世説言語篇46劉注引晋陽秋、謝尚字仁祖、陳郡人、鯤之子也。翻亂喪兄、哀慟過人。

○世説任誕篇33劉注引宋明帝文章志（謝）尚性軽率、不拘細行。兄弈後、往墓還、王濛、劉惔共遊新亭、濛欲招尚、先以問惔曰、計仁祖正当不為異同耳。惔曰、仁祖韻中自応来。乃遣要之。尚初辞、然已無帰意、及再請、即迴軒焉。其率如此。

※晋書謝尚伝、世説注引晋陽秋の記述と、世説注引宋明帝文章志の記述とは全く趣が異なる。晋書謝尚伝のこのあとの記載をみると、「及長、閑率穎秀、辨悟絶倫、脱落細行、不為流俗之事。」とあるから、宋の明帝の文章志の記述は、長じてのちの話ということになる。そうなると、謝尚にはかれ七歳のときに亡くなった兄以外に少なくともう一人の兄がいたことになる。文章志は、世説任誕篇33の、謝尚の叔父袁の死去に際する尚の不謹慎なふるまいを述べた部分の注として引かれたもので、話は同趣、場所もほぼ同じく、登場人物も王濛、劉惔は同じである。兄の葬儀の後のこととする記述に多少の疑問は残るが、今は文章志の記述を信じてみたい。謝尚は父鯤が四十三歳で亡くなったとき（晋書謝鯤伝）、十余歳であったというから（晋書謝尚伝）、いま一人の兄の存在を考えることは不可能ではない。

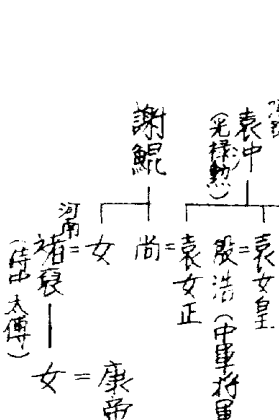
○晋書巻七十九謝尚伝、時康献皇后臨朝。即尚之甥也。

○晋書巻三十二后妃下康献褚皇后伝、康献褚皇后諱蒜子、河南陽翟人也。父裒、見外戚伝。后聰明有器識、少以名家入為琅邪王妃。及康帝即位、立為皇后、封「母謝氏為尋陽郷君。

○世説言語篇54劉注引晋陽秋、（何）充之卒、議者謂太后（康献褚皇后）父裒宜秉朝政、裒自丹徒入朝。

○世説任誕篇37、袁彦道（耽）有二妹。一適殷淵源（浩）、一適謝仁祖。語桓宣武（温）云、恨不更有一人配卿。

○同劉注引袁氏譜、耽大妹名女皇、適殷浩。小妹名女正、適謝尚。



NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

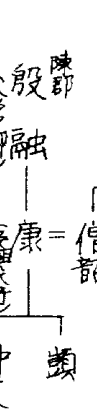
③

○晉書卷七十九謝尚伝、（尚）無子、從弟奕以子康襲爵、早卒。康弟靜復以子肅嗣、又無子。靜子虔以子盡枯維鯤後。

○世說輕詆篇27、殷顗、庾恒並是謝鎮西（尚）外孫。

○同劉注引謝氏譜、尚長女僧要、適庾龢。次女僧韶、適殷歆。

※晉書殷顗伝は、「祖融、太常卿。父康、吳興太守」といい、世說言語篇106劉注引續晉陽秋は、殷顗の弟仲文について、「仲文字仲文、陳郡人。祖融、太常。父康、吳興太守。」という。謝氏譜に「殷歆」とあるのは、殷康の誤りかと思われる。楊勇氏は、「宋本作殷歆、非。当作殷康、是」（世說新語校箋）として晉書殷顗伝、續晉陽秋を証とする。



④

○南史卷十九謝晦伝、裒子奕、拠、安、万、鉄、並著名前史。

○世說言語篇71、謝太傅（安）寒雪日内集、与兒女講論文義。俄而雪驟、公欣然曰、白雪紛紛何所似。兄（拠）子胡兒（朗）曰、撒塩空中差可擬。兄（奕）女（道韞）曰、未若柳絮因風起。公大笑樂。即公大兄無奕女、左將軍王凝之妻也。

○同劉注、胡兒、謝朗小字。續晉陽秋曰、朗字長度、安次兄拠之長子。

○世說紕漏篇5劉注、拠字玄道。尚書裒第二子。年三十三亡。

○世說言語篇77劉注引中興書、謝万字万石、太傅安弟也。

○晉書卷七十九謝安伝、安遣弟石及兄子玄等応機征討、所在克捷。

※謝石は謝安の弟であるが、さて万の上か、万と鉄の間か、鉄の下か、そのあたりが明確でない。晉書謝安伝の目録は、安弟万、万弟石とし、鉄は巻末の子の邈の伝に「父鉄、永嘉太守」と記載されるのみ、とりたての伝はない。鉄が末子かと思われる。前田本世說新語に付された南宋の汪藻の陳郡陽夏謝氏譜（以下汪藻謝氏譜）は、万、石、鉄の順とする。

○世說文学篇39劉注引謝氏譜、朗父拠、取太原王韜女、名綏。

※王韜については調べがつかなかった。汪藻の「太原晉陽王氏譜」にもその名は見えない。

○世說德行篇36劉注引謝氏譜、安娶沛国劉耽女。

○晉書卷七十九謝安伝、安妻、劉惔妹也。

○世說輕詆篇17劉注、（安）夫人、劉惔之妹。

○晉書卷七十九謝安伝付謝万伝、太原王述、万之妻父也。

○世說簡傲篇10、謝中郎（万）是王藍田女壻。

○同劉注引謝氏譜、万取太原王述女、名荃。

○世說方正篇25劉注引謝氏譜、裒子石娶（諸葛）恢小女、名文熊。

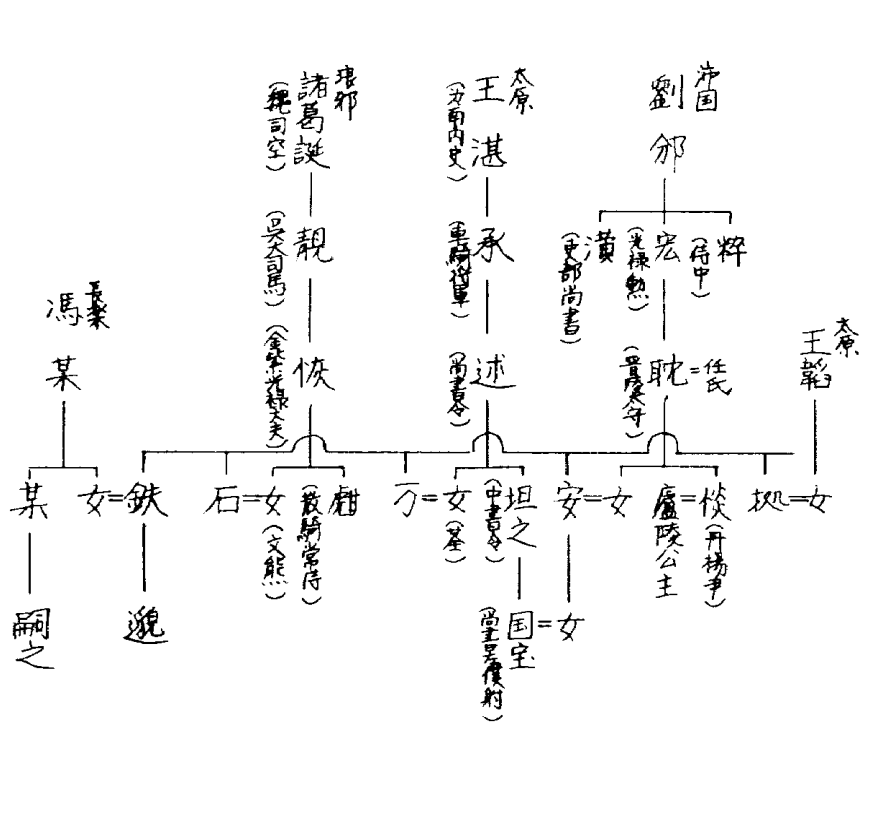
○宋書卷五十三謝方明伝、（謝）邈舅子長楽馮嗣之及北方学

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

士馮翊　仇玄達云云。

※馮嗣之については不明。北燕を建てた馮跋と長楽信都の人である。



⑤

○晉書巻七十五謝安伝付謝奕伝：三子、泉、靖、玄。泉早有名誉、歴義興太守。靖官至太常。

○世説賢媛篇26劉注：淵字叔度、奕第二子、義興太守。

※泉、本名は淵。晉書謝万伝、同王凝之妻謝氏伝では「川」に作る。晉書が泉・川に作るのは、唐の高祖の諱を避けたもの。

○晉書巻七十九謝尚伝：（尚）無子、従弟奕以子康襲爵、早卒。康弟靜復以子粛嗣。又無子、靜子虔以子盡祐継鯤後。

※靖、靜は同一人とみられる。斉の王僧虔の「論書」には、「謝靜、謝敷、並善写経、亦入能境。」とある。

○世説言語篇78劉注引謝車騎家伝：玄字幼度、鎮西奕第三子也。

※世説賢媛篇の劉注によれば、淵の上に一子がなくてはならない。それが康であるかどうかは明確でない。汪藻謝氏譜も明らかにしない。晉書謝尚伝によれば、康は靜の兄ということであるから、淵と靖の間におくことも可能である。今は第一子として表示しておく。

○世説賢媛篇30：謝遏絶重其姉、張玄常称其妹、欲以敵之。有済尼者、並遊張謝二家。人問其優劣、答曰、王夫人神情散朗、故有林下風気。顧家婦清心玉映、自是閨房之秀。

※謝遏は謝玄のこと。遏は玄の小字。姉である王夫人は謝道蘊。同じ賢媛篇28の劉注では謝道蘊を謝玄の妹とするが、誤りである。

○世説言語篇71：公（謝安）大兄無奕女、左将軍王凝之妻也。

○晉書巻九十六王凝之妻謝氏伝：王凝之妻謝氏、字道韞、安西将軍奕之女也。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

⑥

○晋書巻七十九謝安伝付謝玄伝　（玄）以勲封康樂県公。玄請以先封東興侯賜兄子琰、詔聽之、更封琰豫章伯。

※琰は淵、靖いずれの子であるか明らかでない。汪藻謝氏譜は靖の子としている。今従う。

○晋書巻七十九謝尚伝　（尚）無子、従弟奕以子康襲爵、早卒。康弟静復以子肅嗣、又無子。静子虔以子靈祐継嗣後。

※靖の子である琰・肅・虔について、その長幼は不明である。汪藻謝氏譜は、肅、琰、虔とする。

※虔の子は靈祐のほかに少なくとも一子を予想し得る。

⑦

○宋書巻六十七謝靈運伝　祖玄　晋車騎将軍。父瑱、生而不慧、為秘書郎、蚤亡。

○又、（靈運）子鳳、蚤卒。

○南斉書巻三十六謝超宗伝　祖靈運、宋臨川内史。父鳳、元嘉中坐靈運事、同徙嶺南、早卒。

○又、明年、超宗門生王永先又告超宗子才卿死罪二十余条。

○南史巻十九謝靈運伝付謝幾卿伝　才卿弟幾卿清介、時号神童。

○又、兄才卿早卒。子藻幼孤、幾卿撫養甚至。

○南斉書巻三十六謝超宗伝　超宗娶張敬兒女為子婦。

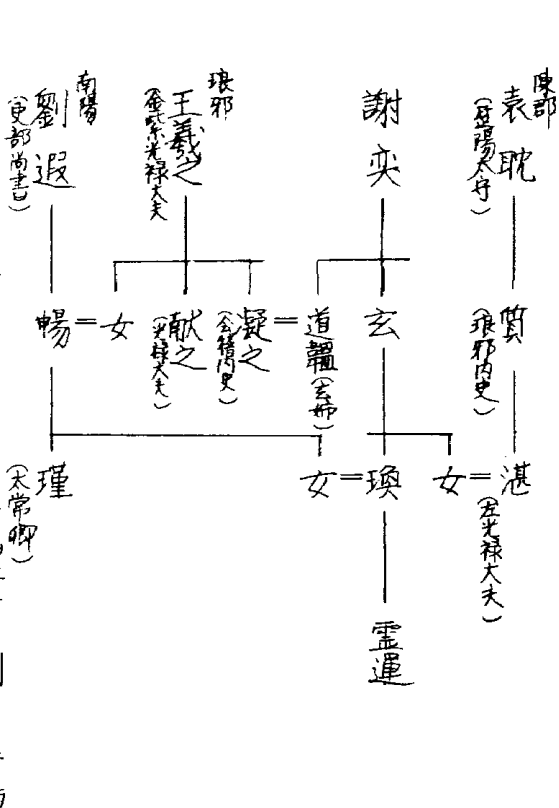
※張敬兒の女を娶ったのは才卿である。永明元年五月、張敬兒が誅され、次いで超宗も捕えられて越州に徙されることになったが、途中の豫章で自尽させられる。（南斉書巻三十六、南史巻十九、謝迢宗伝）　この時、幾卿は年八歳であった。（南史巻十九謝幾卿伝）

○梁虞龢論書表　謝靈運母劉氏、子敬（王献之）之甥。

○世説品藻篇87　桓玄問劉太常（瑾）曰、我何如謝太傅。劉答曰、公高、太傅深。又曰、何如賢舅子敬。答曰、楂、梨橘、柚、各有其美。

○同劉注引劉瑾集叙　瑾字仲璋、南陽人。祖遐、父暢。暢娶王羲之女、生瑾。瑾有才力、歴尚書、太常卿。

○宋書巻五十二袁湛伝　袁湛字士深、陳郡陽夏人也。祖耽、晋歴陽太守、父質、琅邪内史、並知名。湛少為従外祖謝安所知、以其兄子玄之女妻之。



※劉遐、永和初、吏部尚書。世説言語篇54、同劉注引晋陽秋、晋書巻八十三精神伝にみえる。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

⑧

○世説言語篇91劉注引続晋陽秋、（謝）朗字長度、安次兄㨰之長子。

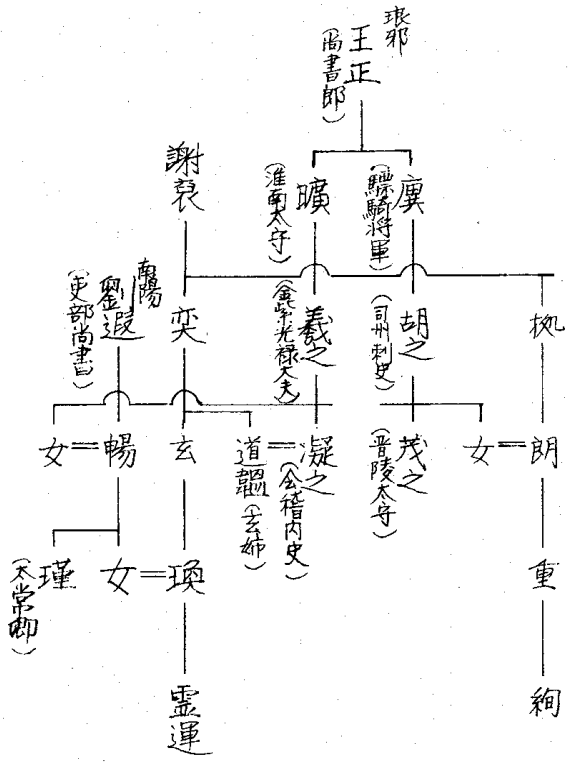
○宋書巻五十二謝景仁伝、謝景仁、陳郡陽夏人、衛将軍晦従叔父也。名与高祖同諱、故称字。祖㨰、太傅安第二弟。父允、宣城内史。

○南史巻十九謝裕伝、謝裕字景仁、朗弟允之子、而晦従父也。名与宋武帝諱同、故以字行。允字令度、位宣城内史。

○晋書巻七十九謝安伝付謝朗伝、（謝重）子絢字宣映。……

絢父重、即王胡之外孫。

※謝朗の子が重。重の外祖父が王胡之であるから、朗の妻は王胡之の女ということになる。



⑨

○世説言語篇98劉注引続晋陽秋、謝重字景重、陳郡人。父朗、東陽太守。重明秀有才名、終驃騎長史。

○晋書巻七十九謝安伝付謝朗伝、子重字景重、明秀有才名、為会稽王道子驃騎長史。

○宋書巻五十六謝瞻伝、瞻（重子）幼孤、叔母劉撫養有恩紀、兄弟事之、同於至親。劉弟柳為呉郡、将姉俱行、瞻不能違、解職随従、為柳建威長史。

※「叔母劉」とあるから、謝重に弟があったことが知れる。この劉氏の弟の劉柳については明確でない。晋書では三かの孫劉耽の子として伝が立てられている。「柳字叔恵、亦有名誉。少登清官、歴尚書左右僕射。時右丞傅迪好広読書而不解其義、柳唯読老子而已、迪每軽之。柳云、卿読書雖多、而無所解、可謂書麁矣。時人重其言。出為徐、兗、江三州刺史。卒、贈右光禄大夫、開府儀同三司。」その二は、巻十安帝紀。「（義熙）十二年六月己酉、新除尚書令、都鄉亭侯劉柳卒。」その三は、巻九十六王凝之妻謝氏伝。「（会稽）太守劉柳聞其名、請与談議。道韞素知柳名、亦不自囲、乃簪髻素裙坐於帳中、柳束脩整帶造於別榻。道韞風韵高邁、叙慨流連、徐酬問旨、詞理無滞。柳退而歎曰、実頃所未見。瞻察言気、使人心形俱服。道韞亦云、親従凋亡、始遇此士、聴其所問、殊開人胸府。」以上の通りである。三者が同一人であるかどうかは、いずれも重なる部分を持

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

たないので決めかねるが、ほぼ同一人とみてよいように思う。劉喬伝と安帝紀の劉柳は位官の高さからみてつながるように思うし、謝氏伝の劉柳は、道韞を感服させた教養が劉喬伝の柳と重ねて無理がない。さて、この三者の記述と謝瞻伝のそれとはまに重なる部分を持たないのであるが、名族謝家との対応から言えば、瞻の叔母劉氏は南陽湟陽の劉喬の孫である劉耽の女と考えるのが筋がよい。ついでながら劉耽にはさらに二女があり、一は桓玄の妻（晋書巻六十一劉耽伝）、一は謝思（万の孫、弘微の父）の妻（宋書巻五十八謝弘微伝）となっている。

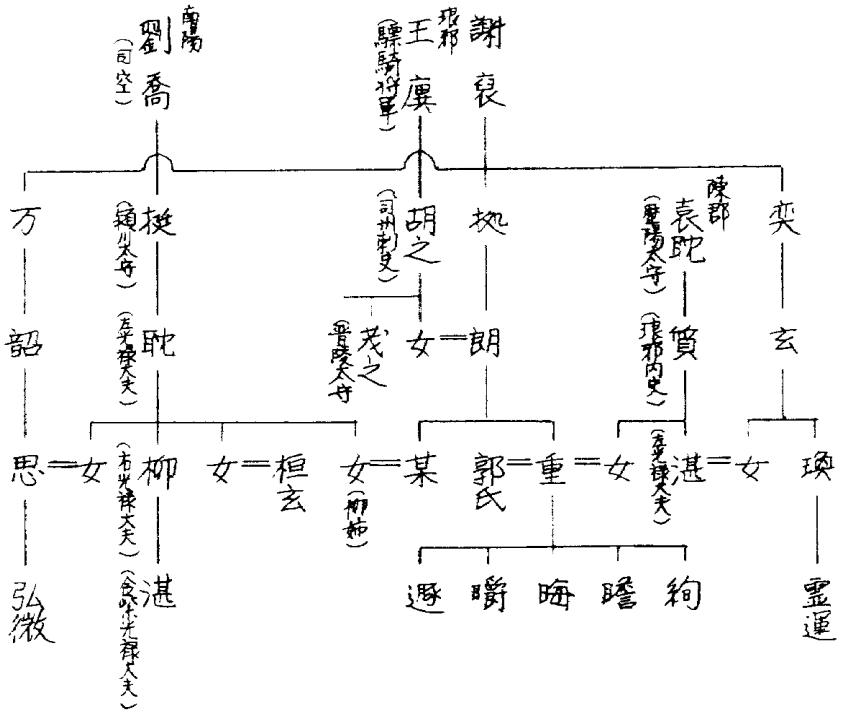
○晋書巻七十九謝安伝付謝尚伝、（重）子絢、字宣映、曾於公坐戲調、無礼於其舅袁湛。湛甚不堪之、謂曰、汝父昔已輕舅、汝今復来加我、可謂世無渭陽情也。絢父重、即王胡之外孫、与舅亦有不協之論、湛故有此及云。

○宋書巻五十二袁湛伝、初、陳郡謝重、王胡之外孫、於諸舅礼敬多闕。重子絢、湛之甥也。嘗於公座陵湛、湛正色謂曰、汝便是両世無渭陽之情。絢有愧色。

○宋書巻五十六謝瞻伝、弟瞻、字宣鏡、幼有殊行。年数歳、所生母郭氏、久嬰痼疾、晨昏温凊、嘗薬捧瞻、不闕一時。

※謝重には絢、瞻、晦、曠、遜という五子があるが、曠の母は袁氏でなく郭氏である。曠のみがそうであるのか、他にも郭氏の子があるのかは明らかでない。郭氏についても詳細は不明である。

⑩



○南史巻十九謝晦伝、（謝）朗子重、字景重、位会稽王道子驃騎長史。重生絢、瞻、晦、曠、遜。

○宋書巻四十四謝晦伝、謝晦字宣明、陳郡陽夏人也。祖朗、東陽太守。父重、会稽王道子驃騎長史。兄絢、高祖鎮軍長史、蚤卒。

○宋書巻五十六謝瞻伝、謝瞻字宣遠、一名檐字通遠、陳郡陽

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

夏人、衛将軍晦第三兄也。

※「第三兄」とあるのは、南史謝晦伝の記述に照らせば、第二兄の誤りである。南史謝瞻伝では「晦次兄」となっている。

○又、弟瞻字宣鏡。

○宋書巻四十四謝晦伝、（元嘉）三年、晦弟黄門侍郎瞻馳使告晦。

○又、衆散略尽、乃攜其弟遯、兄子世基等七騎北走。

○世説言語篇100、謝景重女、適王孝伯児。

○同劉注引謝女譜、重女月鏡、適王恭子滑之。

○宋書巻六十荀伯子伝、伯子為世子征虜功曹、国子博士。妻弟謝晦薦達之、入為尚書左丞、出補臨川内史。

○宋書巻五十三庾登之伝、登之与晦俱曹氏壻、名位本同、一旦為之佐、意甚不愜。

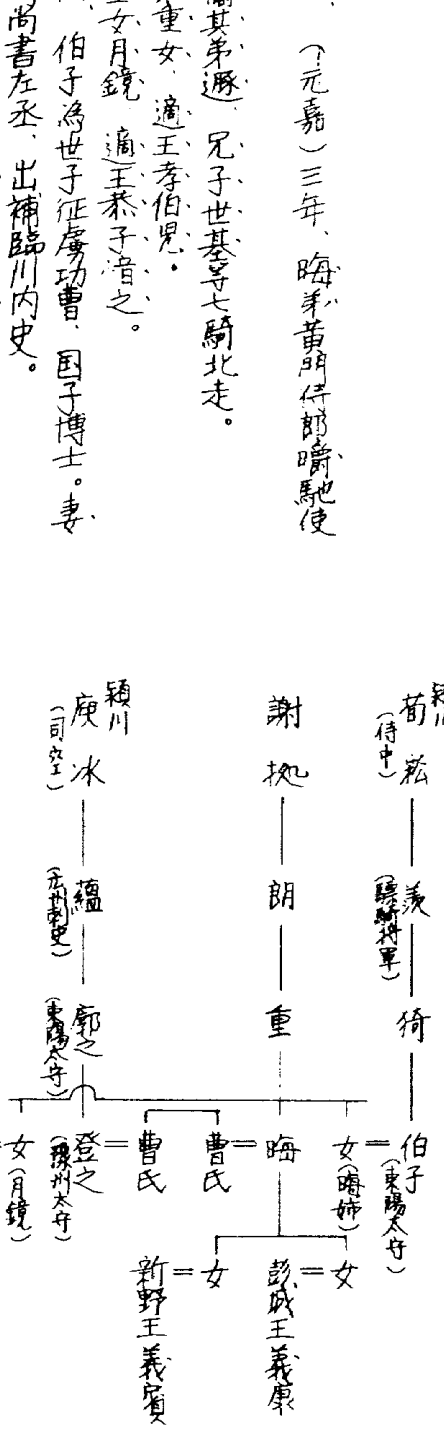
○宋書巻四十四謝晦伝、二女当配彭城王義康、新野侯義賓、元嘉二年、遣妻曹及長子世休送女還京邑。

○南史巻十九謝晦伝、晦女為彭城王義康妃、聰明有才貌。

○宋書巻四十四謝晦伝、太祖誅羨之等及晦子新除秘書郎世休収瞻、瞻子世平、兄子著作佐郎紹等。

※「兄子著作佐郎紹」は、晦の兄である絢、瞻いずれの子であるか明らかでない。しかし次の条に示されるように、絢の子が世基、世猷と名付けられているところからは、瞻の子とみるべきであろう。汪藻謝氏譜も瞻の子とする。

○又、先繫瞻等、猶未即戮、於是与晦、遯、兄子世基、世猷及同党孔延秀、周迫、費信、竇応期、蔣度、嚴千斯等並伏誅。世基、絢之子也、有才気。



⑪

○宋書巻五十二謝景仁伝、謝景仁（名裕）、陳郡陽夏人、衛将軍晦従叔父也。名与高祖同諱、故称字。祖拠、太傅安第二弟。父允、宣城内史。

○宋書巻五十二謝景仁伝付謝純伝、景仁弟純、字景懋、初為劉毅豫州別駕。

○宋書巻五十二謝景仁伝付謝述伝、述字景先、少有志行、随兄純在江陵。

○又、経純妻庾飛過云云

○又、景仁愛其第三弟慥而憎述。

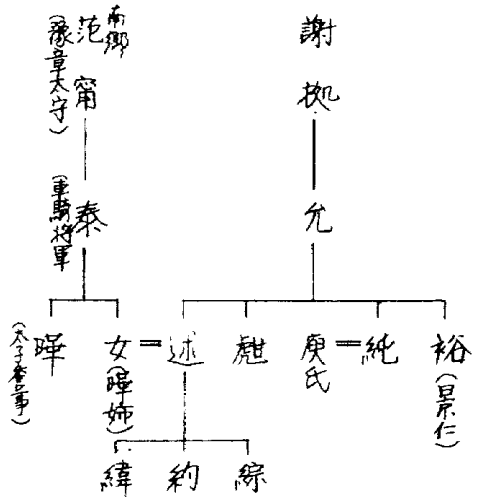
NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

○又、（述）三子、綜、約、緯。綜有才芸、善隸書、為太子中舍人、与舅范曄謀反、伏誅。

○宋書巻六十九范曄伝、曄外甥謝綜、雅為曄所知。

○又、綜母以子弟自陷逆乱、独不出視。曄語綜曰、姉今不来勝人多也。



⑫

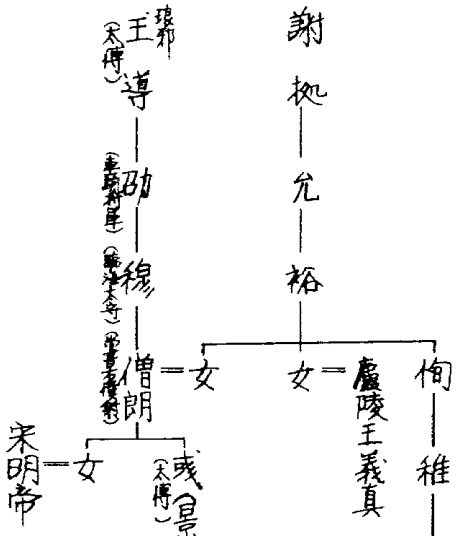
○宋書巻五十二謝景仁伝、廬陵王義真妃、景仁女也

○又、（景仁）子恂、鄱陽太守。恂子維、善吹笙、官至西陽太守。

○南史巻十九謝裕伝付謝恂伝、（裕）子恂字泰温、位鄱陽太守。恂子孺子（宋書作維）、少与族兄莊齊名。多芸能、尤善声律。車騎将軍主戎、孺子姑之子也。

○梁書巻五十謝徵伝、謝徵（南史作微、錢大昕廿二史考異、徵当為微之譌）字玄虔、陳郡陽夏人。高祖景仁、宋尚書僕射。祖維、宋司徒主簿。父璟、少与従叔朓俱知名。

○宋書巻四十一明恭王皇后伝、后兄揚州刺史景文以此事語従舅陳郡謝緯曰、云云



⑬

○宋書巻五十二謝景仁伝付謝述伝、三子、綜、約、緯。綜有才芸、善隸書、為太子中舍人、与舅范曄謀反、伏誅。約亦坐死。緯尚太祖第五女長城公主、素為約所憎、免死従広州。

○宋書巻六十九范曄伝、綜父述亦為義康所遇。綜弟約又是義康女夫。

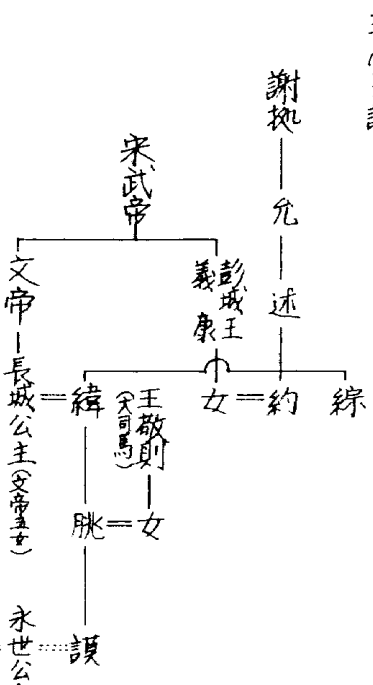
○南斉書巻四十七謝朓伝、謝朓字玄暉、陳郡陽夏人也。祖述、吳興太守。父緯、散騎侍郎。

○又、朓初告王敬則、敬則女為朓妻、常懷刀欲報朓、朓不敢相見。

○南史巻十九謝裕伝付謝朓伝、朓及殷叡与梁武以文章相得、帝以大女永興公主適叡子鈞、第二女永世公主適朓子瑀。及

NII-Electronic Library Service

帝為雍州、二女並曾隨母向州。及武帝即位、二主始隨内還。武帝意薄謨、又以門単、欲更適張弘策子、弘策卒、又以与王志子諲。



⑭

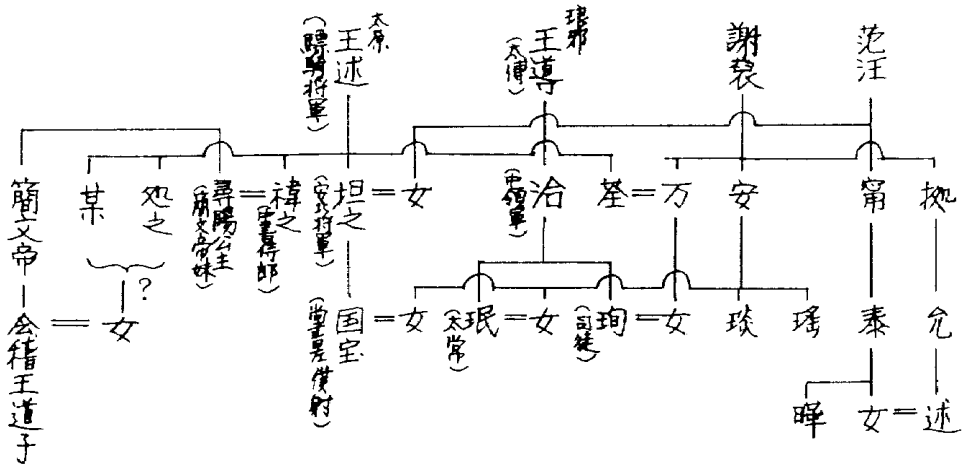
○晉書巻七十九謝安伝、安有二子、瑤、琰。瑤襲爵、官至琅邪王友、早卒。

○晉書巻七十九謝安伝付謝琰伝、先是、王珣娶方女、珣弟珉娶安女、並不終、由是与謝氏有隙。

○世説規箴篇26劉注引国宝別伝、国宝字国宝、平北将軍坦之第三子也。少不脩士業、進趣当世。太傅謝安、国宝婦父也

○晉書巻七十五王湛伝付王国宝伝、従妹為会稽王道子妃。

○又、中書郎范甯、国宝舅也。



⑮

○晉書巻七十九謝安伝、安有二子、瑤、琰。瑤襲爵、官至琅邪王友、早卒。子該嗣、終東陽太守。無子、弟光禄勲模以子承伯嗣、有罪、国除。劉裕以安勲德著世、特更封該弟澹

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

為柴桑侯、邑千户、奉安祀。澹少歴顯位。

○南史巻十九謝晦伝付謝澹伝、澹字景恒、晦從叔也。祖安、晉太傅。父瑶、琅邪王友。澹性達仗気、不営当世、与順陽范泰為雲霞之交。歴位尚書。

○又、初、澹從弟混与劉毅昵、澹常以為憂、漸疎混。每謂弟璞、從子瞻曰、益寿此性終当破家。混尋見誅、朝廷以澹先言、故不及禍。璞字景山、幼孝友、祖安深賞愛之。位光禄勲。

※謝瑶の四子、該、模、澹、璞の長幼は、該、澹、璞については定まるが、模は該の弟というのみで澹、璞とのかかわりが知れない。なお汪藻の謝氏譜は、該、模、澹、璞とする。今從う。

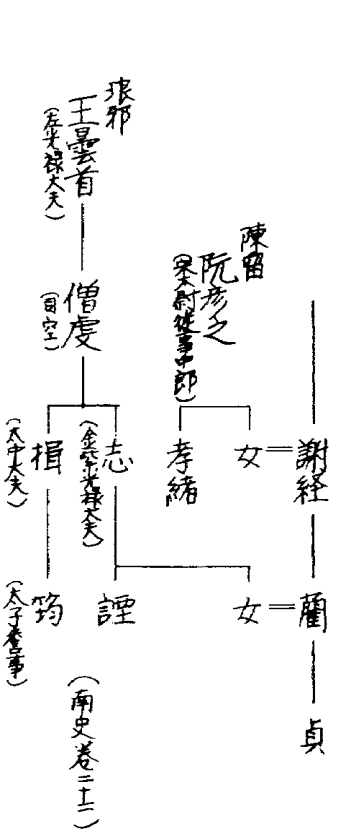
※模の子承伯が該の後を嗣いだということは、承伯の兄弟の存在を予想させる。資料は今のところない。

○梁書巻四十七謝藺伝、謝藺字希如、晉太傅安八世孫。父経、北中郎諮議参軍。藺五歳、每父母未飯、乳媪欲令藺先飯、藺曰、既不覚飢。強食終不進。舅阮孝緒聞之歎云云

○陳書巻三十二謝貞伝、謝貞字元正、陳郡陽夏人、晉太傅安九世孫也。祖綏（梁書、南史並作経）、梁著作佐郎、太子舍人。父藺、正員外郎、兼散騎常侍。

○又、母王氏、授貞論語、孝経、読訖便誦。八歳、嘗為春日閑居五言詩、從舅尚書王筠奇其有佳致、謂所親曰、此兒方可大成、至如風定花猶落、乃追步愈連矣。由是名輩知之。

⑯



○晉書巻七十九謝安伝付謝琰伝、三子、肇、峻、混。肇歴驃騎参軍。峻以琰勲封建昌侯。及於賊、詔贈肇散騎常侍、峻散騎侍郎。

○宋書巻五十八謝弘微伝、祖韶、車騎司馬。父思、武昌太守。從叔峻、司空琰弟二子也。無後、以弘微為嗣。

○又、子莊、別有伝。

○宋書巻八十五謝莊伝、謝莊字希逸、陳郡陽夏人、太常弘微子也。

○世説言語篇105劉注引晉安帝紀、混字叔源、陳郡人、司空琰少子也。

○世説排調篇60、孝武屬王珣求女壻、曰、王敦、桓温、磊砢之流、既不可復得。且小如意、亦好豫人家事。酷非所須。正如真長、子敬比、最佳。珣挙謝混。後袁山松欲擬謝婚。王曰、卿莫近禁臠。

○同劉注引統晉陽秋、初、帝為晉陵公主訪壻於王珣、珣挙謝混、云人才不及真長、不減子敬。帝曰、如此、便已足矣。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

○宋書巻五十八謝弘微伝、義熙八年、混以劉毅亡見誅。妻晉陵公主改適琅邪王練、公主雖執意不行、而詔其与謝氏離絶、公主以混家事委之弘微。混仍世宰輔、一門両封、田業十余処、僮僕千人、唯有二女、年数歳。……高祖受命、晉陵公主降為東郷君、以混得罪前代、東郷君節義可嘉、聽還謝氏。

○又、（弘微）性敏正、挙止必循礼度、事継親之党、恭謹過常。伯叔二母、帰宗両姑、晨夕躬奉、尽其誠敬。

※「帰宗両姑」とあるので、出もどりのおばが二人あったことがわかる。なお「伯叔二母」は、伯父肇の妻、叔父混の妻（晉陵公主）を指すものと思う。

○又（元嘉）九年、東郷君亮、資財鉅万、園宅十余所、又会稽、吳興、琅邪諸処、太傅、司空琰時事業、奴僮猶有数百人。公私咸謂室内資財、宜帰二女、田宅僮僕、応属弘微。弘微一無所取、自以私禄営葬。混女夫殷叡素好博蒲、聞弘微不取財物、乃盜奪其妻妹及伯母両姑之分以還戲責、内人皆化弘微之讓、一無所爭。弘微舅子領軍将軍劉湛性不堪其非、謂弘微曰、云云。

※東郷君は晉陵公主のこと。

※謝混の女壻である殷叡については不詳。南史巻六十殷鈞伝に、鈞の父として殷叡がみえるが別人のようである。この殷叡は、前出の注⑬の南史謝朓伝の朓の子謨に関する条に、「朓及び殷叡は素より梁武と文章を以て相得たれば、帝は大女永興公主を以て叡の子鈞に適かしめ、第二女永世公主を朓の子謨に適かしむ」とみえる殷叡である。この殷叡を謝混の女壻とみることは難しい。謝混が劉毅にくみして誅されたのは義熙八年（四一二）のことで、その時混の女は数歳でしかなかった。前記の永世公主と謨の婚姻のことは、梁の武帝が雍州刺史となった建武五年（四九八）以前のことである。かりに殷叡を混の女と同年として、建武五年の殷叡の年令を考えてみると九十歳以上となる。同じ大明八年（四六四）生まれの梁の武帝、謝朓との年令差は六十歳近くになる。嫁とりをする息子があるはずはなかろうし、こんな老齢で梁武、謝朓と文章を以て交際があったとも思えない。なお南史では、この殷叡の妻は琅邪の王奐の女とする。（巻六十）

※領軍将軍劉湛が弘微の舅子に当たるわけだが、弘微が他家を嗣いだ関係から、養家のそれであるか、実家のそれであるかが明確でない。養家のそれならば、謝爰の妻は劉氏で劉湛のおばになるし、実家のそれならば、弘微の実母が劉湛のおばということになる。判断はあいまいであるが、一応後者とした。理由は注㉔の項参照。

⑰

○南斉書巻四一三謝瀹字義深、陳郡陽夏人也。祖弘微、宋太学。父莊、金紫光禄大夫。瀹四兄、賜、朏、顯、逡、世謂謝莊名兒為風月景山水。

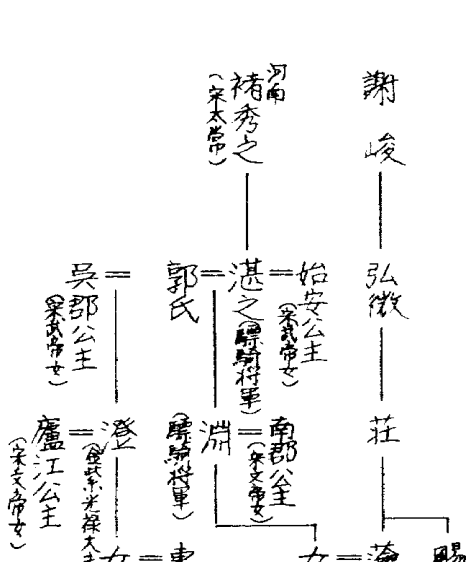
○又、僕射褚淵聞瀹年少清正不患、以女結婚、厚為資送。

○宋書巻八十五謝莊伝、長子賜、晉平太守、女為順帝皇后。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

○宋書巻四十一后妃伝、順帝謝皇后諱穆境、陳郡陽夏人、右光禄大夫莊孫女也。



⑱

○梁書巻十五謝朏伝、子譏、官至司徒右長史 坐殺牛免官、卒家。次子篤、頗有文才、仕至晋安太守、卒官。

○南史巻二十謝弘微伝付謝朏伝、子譏、位司徒右長史、坐殺牛廃黜。

○又、次子譒、不妄交接、門無雑賓。……位右光禄大夫。子哲、字穎豫、美風儀、挙止醞藉、襟情豁朗、為士君子所重。仕梁至広陵太守、侯景之乱、因蜀居焉。仕陳歴吏部尚書、中書令、侍中、司徒左長史。

○陳書巻二十一謝哲伝、祖朏、梁司徒。父譒、梁右光禄大夫。

※梁書謝朏伝の「次子篤」は朏の次子ではなく、譏の次子であろうと判断した。

⑲

○梁書巻十五謝朏伝付謝覧伝、覧字景滌、朏弟瀹之子也。遷尚斉銭唐公主、拝駙馬都尉、秘書郎、太子舎人。……子罕早卒。

○梁書巻三十七謝挙伝、謝挙字言揚、中書令覧之弟也。幼好学、能清言、与覧齊名。

○又、二子禧、蝦、並少知名。蝦、太清中、歴太子中庶子、出為建安太守。

○南史巻二十謝弘微伝付謝僑伝、挙兄子僑、字国美。父玄大、仕梁侍中。

○又、長子褘。

○又、僑弟札、字世高、亦博渉文史、位湘東王諮議、先僑卒。

○陳書巻二十一謝蝦伝、謝蝦字含茂、陳郡陽夏人也。祖瀹、斉金紫光禄大夫。父挙、梁中衛将軍、開府儀同三司。

○又、二子儼、伸。儼官至散騎常侍、侍中、御史中丞、太常卿、出監東揚州。禎明二年卒於会稽、贈中護軍。

○南史巻二十謝弘微伝付謝蝦伝、子儼位侍中、御史中丞、太常卿。伸位尚書僕射。

※謝蝦の子伸、南史は伸に作る。中華書局本陳書は南史によって改めている。

⑳

○晋書巻七十九謝安伝付謝万伝、子韶、字穆度、少有名。

○又、韶至車騎司馬。韶子思(宋書、南史並作思)字景伯、宏達有遠略、韶為黄門郎、武昌太守。思三子、曜、弘微、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

皆歴顕位。

※右の文には乱れがある。「黄門郎、武昌太守」になったのは、韶ではなくて恩である。宋書、南史謝弘微伝に証。

○宋書巻五十八謝弘微伝、祖韶、車騎司馬。父思（晋書作恩）、武昌太守。従叔峻、司空琰第二子也。無後、以弘微為嗣。

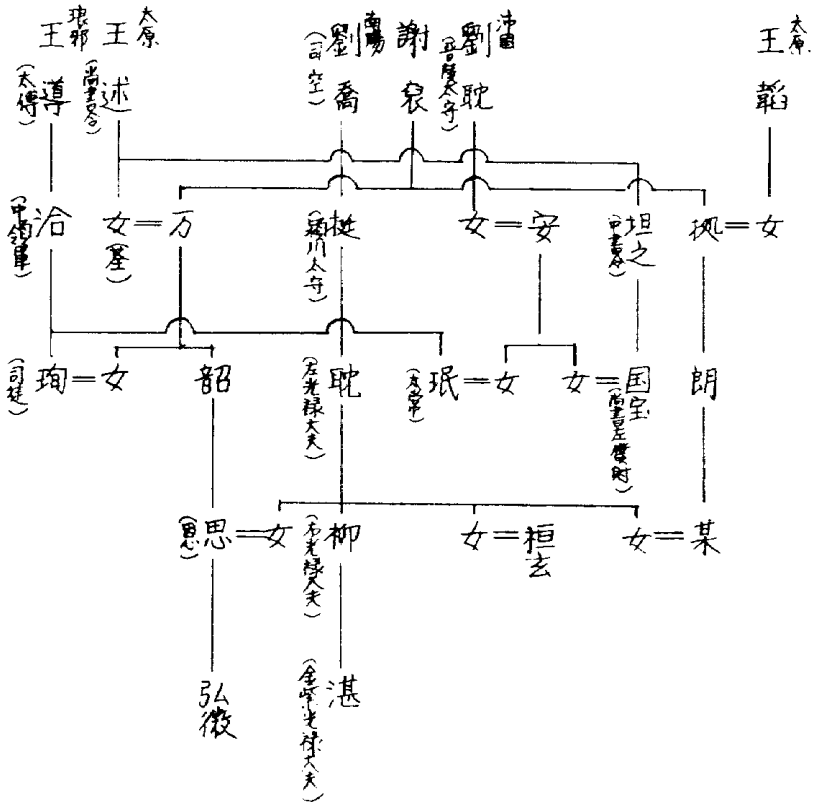
○又、曜、弘微兄、多其小字也。

○又、弘微舅子領軍将軍劉湛……弘微臨終、語左右曰、有二封書、須劉領軍至、可於前燒之、慎勿開也。書皆是太祖手勅。

※前にも述べたように、劉湛が弘微の母の兄弟の子に当たるわけであるが、弘微の実母のそれなのか、養家のそれなのかわからない。しかし宋書謝弘微伝では、謝混を指して「所継叔父混」としている。ことさら「所継」という表現を加えて混と弘微の関係を明確にしているところを考慮してここは、劉湛は弘微の実母の甥としておきたい。

○晋書巻七十九謝安伝付謝琰伝、王珣娶方女、珣弟珉娶安女、並不終、由是与謝氏有隙。

㉑



○晋書巻七十九謝安伝付謝石伝、子汪嗣、早卒。汪、従兄、沖、以子明慧嗣、為孫恩所害。明慧従兄俞復以子昌嗣。

○晋書巻七十九謝安伝付謝琰伝、（琰）与従兄護軍淡雖比居不往来、宗中子弟惟与才令者数人相接。

※右の護軍謝淡については、琰の従兄という以上のことは不明であるが、楊勇氏は、汪の兄弟とする。「汪」「淡」ともに水にちなんだということか、別に根拠があるのかも知れ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ない。不明のまま氏に従う。

(22)

○晋書巻七十九謝安伝付謝邈伝、邈字茂度、父鉄、永嘉太守。

○又、邈妻郗氏、甚妬。

○宋書巻五十三謝方明伝、謝方明、陳郡陽夏人。尚書僕射謝景仁従祖弟也。祖鉄、永嘉太守。父沖、中書侍郎。

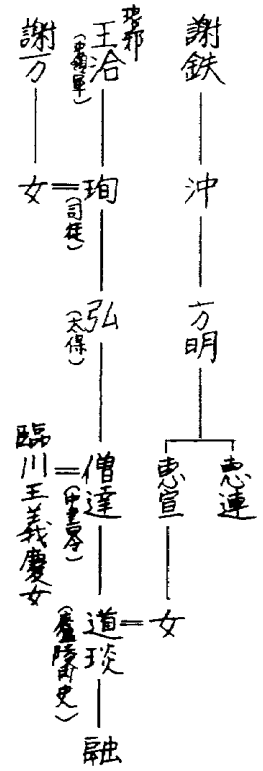
○又、方明随伯父吳興太守邈在郡。

○晋書巻七十九謝安伝付謝石伝、子汪嗣、早卒。汪従兄沖以子明慧嗣、為孫恩所害。明慧従兄喬復以子曷嗣。

※喬復が邈の子であるかどうかは即断できないが、明慧の父沖の兄弟としては邈を確認するのみであるので、そう判断した。また喬復の子曷が謝石の後を嗣いだ以上は、喬復に別に子があったこと当然である。

○宋書巻五十三謝方明伝、子惠連、幼而聰敏、年十歳、能属文。……無子。弟惠宣、竟陵王誕司徒従事中郎、臨川内史。

○南斉書巻四十七王融伝、王融字元長、琅邪臨沂人也。祖僧達、中書令、曽、高並台輔。僧達答宋孝武云、亡父亡祖、司徒司空。父道琰、廬陵内史。母臨川太守謝惠宣女、惇敏婦人也。



NII-Electronic Library Service